

大森伝建・熊谷家

熊谷家は何世紀もの間、大森でとりわけ富裕で影響力のある一家でした。熊谷家は、1867年まで日本全土を支配した徳川新幕府により銀山とその周辺の土地が没収された後、1600年代初頭から権力を拡大し始めました。熊谷家は、鉱山業で財を成しましたが、後には地域の中央政府である奉行所の財政や契約業務など幅広い分野に事業を拡大しました。熊谷家は、少なくとも1718年から「掛屋」と呼ばれており、銀の重量を量り、純度を測定し、粗悪品が見つかった炭鉱業者から集金を行う役目を負っていました。この役目は幕府の徴税活動の重要部分であったため、熊谷家はその働きに対しかなりの報酬を得ました。また、熊谷家の当主は大森地区を管轄し、町奉行と住民との仲介役を担う町年寄に就きました。町役人がしばしば会合を開いた熊谷家の邸宅は、大森町の大部分が火事で焼失した翌年の1801年に再建された二階建ての家屋でした。20世紀末まで住宅として使用されたのち、最後の蔵が完成した1868年当時の外観を復元するために改修された熊谷邸は、石見銀山が栄えた時代の富裕な武家の暮らしぶりを今も伝えています。重要な来客を迎えるための華美な部屋を含め、ほとんどの部屋が見学者に開放されています。